

房総・弘文天皇伝説の研究

井 上 孝 夫

千葉大学教育学部

An Inquiry into the Legends of Emperor Koubun (Outomo Imperial Prince) in Bousou Area

Takao INOUE

Chiba University, Faculty of Education

「壬申の乱に敗れたのち、大友皇子は房総の地に逃げ延びた」という房総・弘文天皇伝説は、房総の伝説のなかでも傑出したものの一つである。このような伝説が成立した背景には、この地域が古代の製鉄民族、多（オオ）氏の支配地域だったことと関連していて、大友皇子のゆかりの人々がオオ氏を頼りに房総に移住したと考えるのが最も理にかなっている。それはまた、「田原」地名の分布にはっきりと刻印されている。田原とはタタラであり、製鉄が行なわれていたことを示しているのである。だが古代の末期から中世にかけて熊野修験道が流入し、その結果、オオ氏の祀っていた田原神は白山神へと姿を変えた。これが、現在の白山神社（君津市俵田）に菊理姫と弘文天皇が祀られている理由である。

キーワード：「田原」地名（“Tawara” Name of a Place）、古代製鉄（Ancient Iron Manufacture）、オオ氏（“Oo” Whole Family）、熊野修験道（Kumano Mountaineering Ascetism）、白山信仰（Hakusan Faith）

〔目次〕

- 第1節 はじめに
 - 第2節 房総・弘文天皇伝説のあらまし(1)
 - 第3節 房総・弘文天皇伝説のあらまし(2)
 - 第4節 房総・弘文天皇伝説の背景
 - 第5節 「田原」地名の由来
 - 第6節 鉄の痕跡
 - 第7節 弘文天皇伝説の担い手
 - 第8節 結語
- 文献

一帯——今日の久留里線の沿線に、『上総壬申の乱』と呼ばれる伝承が、今に伝えられている。

……〔中略—引用者〕……

大友皇子は、この地へ逃がれてきて、小櫃と俵田のあいだに、いわば最後の王国を築くのだが、天武の討伐軍によって壊滅し、ここで戦死したとされる。

現在、小櫃山にある白山神社のあたりが、大友の皇子の陵だと伝えられている。考古学上の出土品も少なくない。海獣葡萄鏡、陶器なども出土している。鏡の方は年代的に合わないが、他に7世紀後半のものと思われる刀も出土している」（『大友の皇子東下り』1994年、309頁）。

第1節 はじめに

千葉県君津市郊外（旧俵田村）に鎮座する白山神社には、菊理姫と弘文天皇が祀られている。菊理姫は白山神社の通常の祭神であるからいいとして、弘文天皇については若干の説明が必要だろう。弘文天皇とは壬申の乱（672年）で大海人皇子に敗れた大友皇子のことであり、大友皇子は戦いに敗れた後、近江から房総に逃げ延び、この地で亡くなったというのである。『日本書紀』では、大友皇子は瀬田で敗れ、山前の地で自害したことになっているので、房総に逃げ延びたというのは伝説上の話であって、ただちに「史実」というわけにはいかない。しかし房総半島のなかでも特に上総を中心とする地域では、この伝説とかかわるいくつかの伝説や史跡が残されていて、白山神社の脇にある通称白山神社古墳にはこの地で自害した弘文天皇が埋葬されている、ともいう。このあたりの事情について、作家・豊田有恒は、次のように書いている。

「木更津市から小櫃川に沿って、大きく迂回する

白山神社古墳は全長88メートル、後円部の高さ10メートルの前方後円墳で、古墳時代前期の築造と考えられており、明治31年（1898年）の発掘の際に、周辺の陪塚からは、海獣葡萄鏡、直刀、鉄鏃などが出土したという。また被葬者については、この地を治めた馬来田国造の関係者だろうとみられている。今日の考古学的観点からみても、弘文天皇云々はやはり史実とはいえないのである。では、なぜこのような伝説が語り伝えられて来たのだろうか。

第2節 房総・弘文天皇伝説のあらまし(1)

そこで、まず、房総・弘文天皇伝説の歴史的経過を簡単に振り返っておくことにしたい。

この伝説が文献のうえで最初に現れたのは、江戸時代に書かれた『久留里記』（『総州久留里軍記』ともいわれる）においてである。これは「久留里付近の伝説や史談を雑多に書き集めたもの」で、著者や書かれた年代は



(写真1) 白山神社山門



(写真2) 白山神社本殿(君津市俵田字天神台)

はっきりとしない。ただし元禄15年(1702年)以前のものとされている。そのなかで、俵田村の白山大権現(現在の白山神社=写真1, 2)は自害した大友皇子の首を祀ったことに由来するものとされたのである。

弘文天皇伝説はその後、中村国香『房総志料』(1761年)や田丸健良『房総志料続篇』(1832年)などにも収録されているが、ここでは藤澤衛彦編『日本伝説叢書 上総の巻』(1917年)や高崎繁雄「白山神社」(1984年)によって、その概要をみておくことにしたい。

まず、旧俵田村周辺の伝説には、次のようなものがある。

- (1) 修行坂——弘文天皇が官軍に追われ、一念発起したところといわれる。
- (2) 王守川(あるいは菰捨川)——追われた天皇が川を渡る際に、喜三太なる者が菰をまとして天皇を背負ったという。
- (3) 御腹川——天皇が割腹した川で、深夜になると流れが逆流したり、水の色が血の色に変色したりするという。
- (4) 塚畑と畠塚——天皇の君臣7人が自害したところが塚畑で、女官たち12人が自害したあとと葬られた場所が畠塚といわれる。12人の女官は下郡の十二社権現に祀られている。
- (5) 手桶の禁忌——自害した天皇の首は手桶に盛って葬られたという。そこで、俵田村など12村では手桶を使わず、手のない小桶を使っている(手桶は天皇

の木像とともに、白山神社に納められている)。

- (6) 蘇我殿の田植え——ある年の5月7日、天皇は蘇我大炊(赤兄)を召して、国中の人民、早乙女の田植えをみたいといった。その最中、田植えが終わらないうちに、天にわかに曇り、稲妻が鳴り響いて大雨が降り出し、田植えの人々は雷に打たれてみな死んでしまった。そののち、その田を「死田」といい、5月7日は「蘇我殿の田植え」といって、田植えをしない日となった。

- (7) そのほかに、関連する神社に次のようなものがある。

子守神社(君津市俵田字姥神): 弘文天皇の乳母を祀る。

末吉神社(君津市末吉字壬申山): 蘇我赤兄を祀る。

拾式所神社(君津市戸崎字野持): 弘文天皇の母・伊賀采女宅子郎女を祀る。

福王神社(袖ヶ浦市奈良輪): 弘文天皇の皇子・福王を祀り、福王丸陵と称する円墳がある。

白山神社(市原市飯給字森前): 大友皇子を祀る。

次に、大多喜町筒森の筒森神社(御筒大明神)に伝わる伝説では、天皇の死後、皇后・十市皇女が当地に逃げ延びたが、流産して亡くなってしまったとされる。十市皇女の産穢は山腹に埋葬された。その場所を「多羅櫃」といい、奉葬した山上を「高塚の陵」という。このような経緯から、土地の人々は御筒大明神を「産婦の守護神」と信じている。

以上が、旧俵田村周辺と大多喜町筒森に残る弘文天皇伝説のあらましであるが、明治時代になってから、千葉県内において弘文天皇伝説の復興をめざす動きが起こった。それは、大友皇子を天皇として正式に認知させることと、『日本書紀』の記載に基づいて墓所を探し出そうとする全国的な動きに呼応するものであった。そうしたなかで、弘文天皇陵確定の中心的な役割を果たした人物の一人が、明治政府の地方行政官だった籠手田安定(こてだやすさだ、1840—1899年)である。彼は滋賀県権令だった当時、39代の天皇として認められた弘文天皇の墓所を長等山園城寺(三井寺)の亀丘に比定し、それに基づいて、1877年に亀丘は正式に弘文天皇陵として承認されたのだった。

このような動きに対して、弘文天皇伝説が語り伝えられてきた千葉県内では、白山神社古墳の実地調査を求める動きが起こった。1871年に、高橋常延(旧久留里藩士)が神祇官に対して「白山神社縁起考」を提出したのをはじめとして、1881年には森勝蔵、鶴見東馬(いずれも旧久留里藩士)ほか、また翌年には俵田村が古墳の発掘調査を求めている。その後、1897年9月に俵田青年会の依頼に基づいて、八木契三郎(東京帝国大学人類学教室職員)と中沢澄男(陸軍教授)による古墳周辺の陪塚の発掘調査が行なわれ、先に述べたような埋蔵物が発掘されたのであった。しかし、このような運動はあったものの、白山神社古墳が弘文天皇陵と認められることはなかったし、収集された伝説も史実として認められることはなかったのである。

第3節 房総・弘文天皇伝説のあらまし(2)

房総における弘文天皇にかかわる伝説は、現在鴨川市に編入されている旧田原村大里や九十九里海岸の北部、野栄町から旭市にかけての地域にも残されている。

まず、旧田原村大里の伝説とは大略、次のようなものである。この地に大裏塚と呼ばれる大塚があり、その山上に「いしみや」という古祠があって、聖権現と呼んでいる。付近を往来する者は、馬より降りて一礼するという。また宝暦の頃（1751—1764年）、領主がこの地に穀倉を建てたところ、一夜にして理由もはっきりとわからないまま、崩れたともいう（藤澤衛彦編『日本傳説叢書安房の巻』1919年、268-269頁）。だが、この伝説を採集した藤澤はこの伝説を怪しいという。そして俵田村の大友皇子の伝説とかかわらせて、皇子が自害したのち、従者がこの地に身を伏せていたのだと推測し、それが「大裏塚」あるいは「大裏屋敷」の由来なのだとしている。

ここから明らかなように、旧田原村の弘文天皇伝説は房総・弘文天皇伝説を信じる藤澤衛彦の解釈の結果に基づいて生まれたものであり、あるいは創作といってもよいものなのかもしれない。もちろん、田原地名の同系性や「大裏」にまつわる由来は検討しなければならないが、このような経緯があるため、旧田原村大里の伝説についてはここではひとまず除外しておくことにしたい。

次に取り上げる野栄町から旭市にかけての伝説では、弘文天皇妃が従者ととともにこの地に逃げ延びてきたという。その文献的な根拠は、旧川口村在住の明内豊明の所蔵図書のなかに含まれていた記述のなかにある（これらの図書は、明治時代初頭に書き写されたものである）。まず、天慶3年（940年）の書とされるもののなかに、「天武天皇の時、官女が兵乱を避けて従者18人を連れて東国に下った。中臣常盤の孫・英勝が供をして、白鳳元年（672年）、下総の海辺に上陸したが、脳病により崩じたので、之を埋葬した」とある。そしてこれにつづいて、永長元年（1096年）の書には「官女は中臣鎌足の女である」とされた。

これらの文書に基づいて、佐倉出身で八日市場警察署長を務めた広田彬は1882年に旧野手村内裏塚に碑文を建てて、参列者1,000人規模の私祭を行なっている。そしてこれ以降、文献上は単に「官女」と書き継がれたものが「官女とは藤原鎌足の女、耳面刀自のことで、弘文天皇妃である」とされることになったのである。現在、弘文天皇妃耳面刀自と弘文天皇を祀る内裏神社（写真3）の縁起は大略、次のようにいう。

「中臣英勝8世の孫・美敷の少女に神憑りがあり、清浄の土地を選んで、墳土を遷せという。美敷、貞雅、雅次らは相謀り、椿の海辺に聖地を選び、野田〔野栄町〕の墳土を遷し、霊廊となした。天慶3年9月のことという。嘉保年中（元年＝1094年）、英勝14世の孫・中臣正勝、日月の旗を証拠に、八幡太郎義家を介して、堀川院に官女のことを上奏。封地を賜り、自ら茶磨丘陵（近江国）より霊璽を遷し、内裏の称号を受ける。妃と大友皇子を祀り、ここに内裏神社が成立した。以来、大塚原は内裏塚原と称



（写真3） 内裏神社（旭市泉川1502番地）



（写真4） 大塚原古墳（旭市大塚原1177番地）

す。」

この地域にはもともと、野栄町の海岸近くに円墳が2基あり、内陸の大塚原に1基の古墳があった。そして大塚原の古墳は、海岸近くの2基に対する遥拝所とみなされていた。それに対して、この縁起では海岸沿いの古墳を弘文天皇妃の最初の埋葬地とし、大塚原の古墳を改葬地とみなしているのである。

ところで、この大塚原古墳（写真4、5）からは1891年、風雨で崩壊した部分の修復作業中に、人骨、土器、鏡、珠、刀剣などが出土した。そして石棺の蓋には、「連金子英勝」と線刻されていたといわれる（人骨は埋め戻されたが、出土品は管理不十分のため散逸、蓋は土台の石をつけて英勝の墓石としたが、文字部分は消滅してしまった）。その後、1971年に古墳周辺を整備するにあたって、人骨が再度発掘され、その際に新潟大学医学部による調査が行なわれた。出土人骨は保存状態が悪く、一括して深甕に入れられていたため、個体識別が困難であったが、調査によって、頭蓋骨などから少なくとも三遺骨が埋葬されていたことがわかった。いずれも壮年期（ないし熟年期）の男性骨と推定され、そのうち二遺骨については側頭骨の一部に「薄く紅赤色に染まった部分」があった。その染色について、「調査概要」では「紅赤色に人骨が染まっている例は古墳時代のものに特に多くみられる」とされたが、結論的には「伝承によればこの人骨群は改葬や他墳墓からの追葬などがあったことになっているが、確実なところは男性骨が三個体分はある



(写真5) 「連金子英勝」と彫られた墓標

と思われる。しかし、性別を示さぬ破片が細片となって多数あり、正確な個体数や性別は目下の段階ではわからない」というにとどまった(旭市史編さん委員会『旭市史』第1巻, 1980年, 29-32頁)。

この人骨と伝承がどこまでかわるのかについては、疑問も残る。しかし石棺の蓋に刻み込まれていた「連金子英勝」の文字がもつ意味は大きい。これは「連・金の子・英勝」と読み、壬申の乱の後、死罪となった中臣連金の子供の中臣英勝を指す、というのである。この物語によって、明内豊章所蔵図書における「天武天皇の時、官女が兵乱を避けて従者18人を連れて東国に下った。中臣常盤の孫・英勝が供をして、上総の海辺に上陸した」という記載には、一定程度の信頼性が出てくることになるからである。しかし明治時代になってから、官女を弘文天皇妃とみなし、倭田の弘文天皇伝説と結びつけるのは明らかに飛躍がある。結局、最大限伝説を信頼したうえで考えられるのは次のようなことになるだろう。すなわち、「壬申の乱の首謀者として処刑された右大臣中臣連金の子は『古事記、日本書紀』によれば流刑されたという。それが中臣英勝かどうかはわからないが、英勝と考えたとき、どこへ流刑されたのだろうか。都から遠い東国に流刑された可能性は高い。……[中略—引用者]……英勝は中臣氏である。英勝の流刑に弘文天皇妃が同行したというより、近江朝廷が敗れて行き場を失った官女が同行したのではなかろうか。しかもその官女は中臣氏一族の女性である可能性が大きい」(旭市市民会館・図書館・文書館『弘文天皇妃伝説』1993年, 17頁)。わたしは、この記述に賛同したいと思う。

第4節 房総・弘文天皇伝説の背景

旧田原村や九十九里北部の弘文天皇にかかわる伝説の洗い直しを踏まえて、再び、倭田周辺の伝説に戻ってみたい。このような伝説が生まれた背景は、一体どのようなものなのだろうか。既存の研究を検討してみよう。

まず民俗研究家・平野馨は、次のような事柄を指摘し

ている(『伝承を考える—房総の民俗を起点として』1982年, 162-166頁)。

- (1) 白山神社の別称・田原神社の「田原」という名称は、京都で大海人皇子伝説のよりどころとなっている宇治田原町とかかわっている(その場合、大友と大海人とは混同されていることになる)。
- (2) また、大和国十一郡田原の地は多氏の本拠地であり、多氏とのかかわりも考えられる。
- (3) 房総は天長3年(826年)以来、親王所在の太守国でもあった[この年、上総、常陸、上野の三国は親王が太守に補任される親王任国となった—引用者註]。
- (4) 隣接する木更津市には、大友皇子のよき理解者、藤原鎌足の伝説もある[木更津市の高蔵寺の縁起によると、木更津市矢那の猪野長者の娘の子が藤原鎌足だという—引用者註]。

この平野の指摘はいずれも「なるほど」と思えるもので、房総・弘文天皇伝説の背景を抑えておくうえで、一定の意味をもつものといえるだろう。

この平野説につづいて、歴史家・大和岩雄が『人麻呂伝説』(1991年)のなかで、高崎正秀『物語文学序説』(1971年)や細矢藤策『古代英雄文学と鍛冶族』(1989年)などを踏まえつつ、重要な指摘をしている。大和は柿本人麻呂にかかわる伝説を検討していくなかで、人麻呂の上総配流伝説があることに言及し、それが上総の和邇氏の一族とかかわっていると述べている。例えば、東金市の「小野」という地名は[和邇一族のなかの]小野氏ゆかりのもので、同じく東金市田中の山部赤人の墓と伝承される赤人塚は、人麻呂伝説を伝えた小野氏による赤人伝説の創作に基づくものと指摘してしている(大和, 1991: 234-235, なお、東金市田中は旧田中村で、福俵村などと合併して大和村となり、さらに現在の東金市となった。また、法光寺には赤人像のほか、赤人ゆかりの伝記、宝玉などが伝わっている)。そのうえで、上総における大友皇子(弘文天皇)や人麻呂にかかわる伝説は、この地域における「近江系の人々の存在」と切り離して考えることはできない、というのである(大和, 1991: 235)。

この大和の視点は上総と近江とのかかわり、とりわけ倭田の白山神社の成立事情の背景を指摘するものとして重要である。だが時代的な特定は、はっきりとしない。

結局、これらの研究は房総・弘文天皇伝説の成立の背景について、一定の根拠を示してくれてはいるのだが、いつ頃、どのような事情でこの伝説が成立したのかという点にまで踏み込んで考察しているわけではないのである。

第5節 「田原」地名の由来

そこで、「田原」という地名を手がかりにして、房総・弘文天皇伝説の背景について、さらに検討していくことにしよう。文献(『三代実録』元慶8年(884年)7月15日条)のうえでみると、この白山神社のもともとの祭神

は田原神であった。田原というのは明らかに、この地の旧名「田原田」（現在は俵田と書く）につうじている。平野（1982）は、田原地名が宇治や大和の田原とつうじているのではないかと指摘しているが、その一方で、この田原というのは大和（1991）がいうように、近江の田原にもつうじていることに注目しておくべきだろう。

5.1 大和の田原

まず大和の田原についていうと、そこは確かに多氏の本拠地とも呼べるような土地であった。そしてここにはタタラベ（踏鞴部）という地名があり、古代には鏡などを鑄造する民部がいて、そのなかに、タタラを姓とする者があった（池田末則『日本地名伝承論』1977年、158-161頁）。現在でも、鏡作神社が鎮座する金属にゆかりの地である。

5.2 近江の田原とのかかわり

近江の田原といえば、瀬田橋のうえで大蛇をまたぎ、それを見込まれて三上山の百足を退治した俵藤太のゆかりの地である。この百足退治の話は百足になぞらえられる先住製鉄民を後続の製鉄民が支配、服従させたエピソードを語るもの、ともいう（真弓『古代の鉄と神々』1985年）。その意味で、俵藤太は先進的な製鉄民を象徴する存在である。その一方、俵藤太は藤原秀郷の別称といわれる。つまり藤原の一族である。この藤原氏は次のような理由から、俵田村を含む小櫃村周辺地域とかかわりをもつと考えられる。小櫃村の一角は古代の畔蒜郡新田（ニフタ）郷に比定される（高崎繁雄、1984）。この畔蒜郡は「アヒル」姓（阿比留、畔蒜などと表記する）の発祥地であり、アヒル姓は藤原氏と結びつく、というのである（丹羽基二『苗字の由来百科』1992年、49-50頁）。ということは、この地域と藤原氏の始祖・鎌足や俵藤太などとも何らかのつながりが考えられるということである。

そしてまた、近江の地は白山信仰の一つの拠点であり、この地で白山信仰は十一面観音信仰と習合したのだった（十一面観音は白山神の本地仏ということになる）。このような事情は、田原神が白山神社に改名される背景とあってよいのだろうか。確かに、大和（1991）がいうように、近江の田原にゆかりの藤原氏系の人々が上総のこの地に白山信仰を携えてやって来て、白山神社を建立し、自身にゆかりの田原神を祭神としたのではないのか、と考える余地は残されてはいるのである。だがその一方で、より根底的な事情がある、と考えてみる余地もある。田原神の白山神への変更はその謎を解く鍵である。

5.3 田原地名の由来について

そもそも「田原」とは何か。大和の田原も近江の田原も、ともに製鉄などの金属伝承とかかわっている。白山神社の田原神も俵田地名にその痕跡を刻むとともに、藤澤衛彦によって弘文天皇の従者の子孫が隠れ住んだといわれ、大裏塚という皇子にゆかりの者の墓所があると解釈された鴨川市田原の地名由来も視野に入れる必要があるはずである。またそれとは別に、東金市「福俵」という地名も「田原」にかかわるものと思われる。これらに



（写真6） 観音山

共通する「田原」とは、一体何を意味しているのだろうか。

それを解くためには、ある種の飛躍が必要である。その飛躍とは、次のようなものである。わたしはこれまでに、製鉄民俗の検討の一環として「畠山重忠と鉄の伝説」（井上、2000）を書き上げ、「重忠は製鉄民と密接な関係がある」という結論を得ていた。それから半年ほどして、谷有二『「モリ」地名と金属伝承』（谷、2000）が刊行され、その本文および巻末に清水寿『鑄師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』（清水、1994）という参考文献が挙げられていた。これはわたしの問題関心にぴったりだ、と思い、こうしてわたしは、谷（2000）を介して清水の重忠研究に出会うことになったのである。

清水寿は重忠の生誕地・埼玉県川本町出身の医師で、私立医大の理事などを務めたのち、川本町で清水クリニックを主宰している。本業の傍ら、郷土の英雄畠山重忠にゆかりの土地を訪ね、そこで得た鉱物の成分分析をつうじて、重忠が「鑄師・鍛冶師の統領」であることを立証していたのである。そして「田原」の謎を解く鍵は同書の、川本町に隣接する観音山に関する記述のなかにあった。

この観音山は熊谷と秩父を結ぶ国道140号線バイパスのすぐ脇にあり、裏手には新幹線の高架が通っている。標高わずか82mということもあって気づきにくい山だが、その形は富士山を小型にしたような美しい姿をしている（写真6）。過日、清水の研究に導かれて現地に行ってみたので、そこで感じたことを少しまとめておきたい。

秩父鉄道の明戸という駅から観音山に向かうと、途中に沙間池跡という碑が建った場所に出る。いまは水田になっているが、もともとは観音山を使って鉄穴流しをしていた際の鉱石の沈殿池だったところだという。ここから国道を渡り、まず観音山直下の龍泉寺に出た。本尊は不動明王だが、別に観音堂があって千手観音が祀られている。だがそれとは対照的に、裏手の斜面は赤土や岩石がむき出しになっていて、鉄穴流しの跡をみせている。そしてその斜面を登れば、観音山の山頂にはあっけなくたどり着くことができる。

実は観音山というのは通称で、この山の本来の名称は狭山なのだという。狭山の「狭」とは砂のことで、つまり砂鉄の採れる山という意味だろう。その狭山に観音様を祀ったから観音山になるわけで、その逆ではない。つ

まり観音を本尊とする寺院を建立したのちに、その寺院の裏山で鉄穴流しをするはずはない、ということである。わたしはここで、観音信仰というのはこの鉄穴流しに由来する、つまり観音は「鉄穴」なのだ、ということをはっきりと理解した。簡単にいえば、観音山も観音堂もかつて行なわれていた鉄穴流しの遺物のようなものである。そしてこの点はもしかすると、全国各地の観音山と呼ばれる山の由来を解くための鍵となるかもしれない。

さて、以上は前置きで、ここからが本題である。この観音堂から西に、観音山の山裾の位置に薬師如来を本尊とする田原薬師の御堂がある。この田原とは何か。それはタタラなのだという。タタラが転じてタワラになった、ということである。「足でふいごを踏んで金物や和鉄をつくったところに建てた御堂」がこの田原薬師なのである。考えてみれば単純な話である。しかしそのことになかなか気がつかない。いわれてみれば、はっとする。

例えば俵藤太の「俵」について、これまでどのようなことがいわれていたのか、というと、百足退治の功績として米俵が与えられたから俵藤太なのだ、というのが中世の軍記物語『太平記』の説明。それに対して、物質民俗学の若尾五雄はさすがに藤太と製鉄とのかかわりについて十分把握してはいるものの、俵と鉄とのかかわりについては何も言及してはいない（『黄金と百足』1994年）。

では、田原をタタラの意味にとると、上総俵田の田原神はどういうことになるのだろうか。田原神はタタラ神だし、それが白山神になるというのは、白山信仰が製鉄にかかわることを示唆するものだろう。その田原神が鎮座する俵田は「タタラ田」であり、俵田と同系地名の東金市福俵は「吹く・タタラ」（すなわち、タタラを吹く）が語源だと考えられる。

ということで、房総の田原神の謎は畠山重忠の研究をつうじて、タタラ、製鉄、観音信仰へと結びつくことになったのである。

第6節 鉄の痕跡

では、房総の田原地名に金属伝承はどのようにかかわっているのだろうか。

まず、上総俵田を取り上げてみよう。第2節で触れた弘文天皇伝説のなかに、敵方の軍勢に追い詰められた弘文天皇が、自害するにあたって腹を洗った川ゆえに御腹川という名称が起こったとされる川がある。その御腹川は「切腹の時、やさしい天皇の死を悲しんだ里人の想いで、川の水が反対に流れたという。後々までも、時々逆流するとか、人の血が流れると伝えられている」（奥平正子「君津の白山神社に伝わる大友皇子の落去伝説」1990年、19頁）。この伝説は、製鉄とのかかわりで意味をもっている。後半でいわれる「人の血が流れる」というのは川の水が時に赤茶けるときがある、ということをしているのだろう。これはおそらく鉄穴流しの所産であり、鉄分を含んだ川の水が血の流れにたとえられたものだろう。また「川の水が反対に流れた」というのはまさしく「逆川」の伝説といってよい。ここには、鉄穴流しによって川に大量の土砂が流れ込んで水流を堰止め、川の水が逆流したことが何らかのかたちで反映されてい

るのではないだろうか（この「逆流する川」としての逆川の由来については、井上『『逆川』伝説の研究』2003年、で検討を試みている）。

このように考えてみると、田原の地の弘文天皇伝説はやはり製鉄がからんでいるとみて差し支えない。製鉄といえば、白山神社古墳の陪塚には太刀や鉄鎌が埋納されていたわけで、この古墳にゆかりの人々からして製鉄の民であったのだ。そして彼らがつくった古墳の形式は「畿内における大型古墳はしばしばその陪塚に遺体を埋葬しない施設を設け、そこに大量の鉄器を埋納していた」（村上恭通『倭人と鉄の考古学』1999年、132頁）という指摘と重なり合うように、製鉄にかかわる豪族の古墳だったのである。

時代はくだって中世になると、鎌倉の刀匠・新藤五国光という人物が愛宕権現の神託によって愛宕山（標高192メートル）の山裾に砂鉄層を発見し、この地で7年間にわたって刀を打ったといわれる（土橋『小櫃川流域のかたりべ』1996年）。また時代ははっきりとしないが、良弁作の不動明王像を本尊とする常光院叶谷寺も、修験系の寺院で、製鉄と縁の深い良弁が付随し、しかも叶谷（金屋谷につうじる）に位置することから考えれば、これもまた製鉄ゆかりの寺院と考えることができる。

次に、鴨川市の旧田原村である。この地と製鉄とのかかわりを直接結びつけるものははっきりとしない。また地名から類推された弘文天皇ゆかりの伝説についても、その根拠が弱いためにどちらかというとな否定的にみるよりほかはない。しかし一応、次のようにいうことはできる。この田原村は内陸部に位置し、その北西には良弁開山伝承をもつ大山がそびえている。そしてこの大山を中心とする周辺地域こそ、製鉄地帯だったのである（柴田弘武「常総の風土と古代製鉄」1998年）。それゆえ、ここでも田原が製鉄と結びつく可能性は大きい。

最後に、九十九里北部の弘文天皇伝説にかかわる地域も有数の砂鉄採取地帯であった。旭市の足川、中谷里、井戸野では近年まで砂鉄の採取が企業的に行なわれてきたし、また内陸の八街市滝台で発掘された古代の製鉄工房の原料は九十九里海岸から運ばれたものである（毎日新聞千葉支局『九十九里』1973年）。

このように田原地名と弘文天皇伝説は、製鉄によって結びついている。では、その担い手は一体どのような人々だったのだろうか。

第7節 弘文天皇伝説の担い手

そこで再び、俵田の白山神社に戻ることにしよう。

まず、これまでわかっていることを改めて確認しておく、次のようになる。

- (1) 白山神社の脇の前方後円墳は弘文天皇を葬ったものではなく、馬来田国造にかかわっている。
- (2) 9世紀後半までの時期に、前方後円墳の脇に田原神が祀られた。
- (3) 文献のうえで、古墳や白山神社（大権現）が弘文天皇伝説と結びつけられたのは『久留里記』が初出であるが、この文書は著者、刊行年ともに不明。た

だし、いくつかある写本の記載に基づいていえば、遅くとも17世紀後半（寛文から元禄の頃）の時期には成立していたと考えることができる。

房総・弘文天皇伝説を学問的な研究対象として考えようとする立場に限定するならば、今日、この伝説を「史実」としてみなす研究事例は皆無といってよい。大方は、田原神から白山神社へと改称された時期と『久留里記』の成立までの時期とのあいだに、この伝説が成立したようにみなしているようにも思われる。例えば、先に触れた大和（1991）は俵田の白山神社と近江における白山信仰との結びつきを一つの論拠にしている。それゆえに、伝説の担い手は房総に移住して来た「近江系の人々」ということになる。また、房総・弘文天皇伝説の成立を『久留里記』の完成をもって認める星野良作『研究史 壬申の乱』（1973年）の見解に依拠すれば、それは江戸時代につくられた話だということになる。

このような状況のなかで、「古代英雄文学」と金属伝説との関連に注目する研究では、次のような「一般化」が行なわれている。

「村落共同体の中に割り込んだ外来者——金属工匠が村人の前に自分達の奉持する神の力、ひいては自分達自身の力を誇示することによって村人を言向け和平するための方便であったと考えられるのである」、「古代の英雄文学は、この故に金属工匠の間に育まれ、携えられて来たものと考えられる。たたらを構えたその地に土着したのが伝説となり、その伝承の集大成され、文字化されたものが英雄文学として花開き、実を結んだものと考えられる」（細矢，1989：192，193）。

この説は弘文天皇伝説の背景を金属生産とのかかわりで捉えていくうえで、一つの有力な視点を提示している。だが、ここでの基本的な論点を房総・弘文天皇伝説に当てはめることはできるのだろうか。

伝説の担い手が金属にかかわるということはいいいとして、彼らは村人とは全く無縁の外来者だったのだろうか。わたしには疑問が残るのである。この点に関しては、次のような指摘に注目すべきである。

『壬申の乱』において、大海人皇子（天武天皇）は甥の大友皇子を攻めて長等の山前において自縊させたと『日本書紀』には書かれてある。が、伝説によると、自縊したのは実は兄の従兄の赤田常世で、皇子の身替わりとなり、その間、皇子は廷臣、重臣を引具して山間樵路を経て、ともかくも瀬田、宇治、淀の水路を利用され難波から乗船して妃・耳面刀自の父君たる藤原鎌足の出生の地と伝えられる上総国望陀郡矢那の地を指向され、到着後、大友皇子に同情する上総の国守の助力を得て今日の白山神社の附近の遣水という所に城を築いた。当時は、この下を流れる川を小川と言ったので、小川の城と称した」（吉田政芳「白山神社と大友皇子の伝説」1978年，205-206頁）。

ここで重要なことは、大友皇子の伝説は鎌足の出生地とかかわっている、という指摘である。実際のところ、大友皇子にゆかりの人々は上総と何らかのかかわりをもっていたのではないか。それはやはり、すでに平野（1982）によって指摘されているように、オオ（多）氏の存在である。白山神社古墳の被葬者とされる馬来田国造も、また藤原鎌足とともにオオ氏の一族であった（柴田弘武『東国の古代』1980年，ちなみに、わたしは、「下総地域における龍神信仰」1997年，で述べたように、このオオ氏を秦氏の一部を構成する氏族と考えている）。その上総のオオ氏をめざして、やはりオオ氏のなかの大友皇子にゆかりの人々がこの地に移住し、皇子の伝説を語り伝えたのではないか。そう考えることによって、金属生産とかかわる「英雄」として大友皇子（弘文天皇）が登場する理由がはじめて説明できるのである（従って、田原神はタタラの神であり、なおかつオオ氏の祖神ということになるはずである）。

このように、古代の豪族・オオ氏の一連の動きが房総・弘文天皇伝説をめぐる第一段階である。この時期は金属生産における古典的な時代であり、おそらく房総・弘文天皇伝説の原型が成立した時代である。

ところが、この地に祀られていた田原神はある時期から白山大権現に改称される。その理由は何か。この点についてはこれまでも弘文天皇伝説と結びつけられて、「大友皇子が敗者であったがゆえに」といった指摘もあった。つまり、歴史の闇に葬り去られた敗者を神として祀るのが白山信仰だというのである。あるいは近江田原の地の白山信仰がもたらされたものだ、ともいわれる。だがわたしは、この地が古代末期に熊野山領となったことの帰結だと考える。俵田に隣接する旧箕輪村の熊野神社の縁起によると、源頼光が天延2年（974年）に紀州の三熊野をこの地に勧請したという。多分に伝説の域を出ない縁起ではあるが、この地が古代末期より熊野山領であったことは歴史的事実である。そして熊野信仰のちに白山信仰を取り込む。その結果として、この上総の地においても白山信仰がもたらされ、田原神社は白山大権現となった、と考えるのが自然である。この「大権現」という名称は明治初年まで使われた白山神社の正式名称であり、この名称それ自体が熊野信仰の反映である。もちろん、この時期においても金属は重要な位置を占めており、刀剣などの武器としても、農耕具としても、金属生産は地域の根幹を支えていたはずである。

では、九十九里北部の伝説はどのように位置づけられるのだろうか。正確にいうと、この地域の伝説は弘文天皇と直接かかわっているのではなく、近畿にいたオオ氏（大友皇子とかかわりをもつ中臣英勝とその周辺の人々）の東国への移住の話である。この話自体の信憑性にも問題はあるが、「連金子英勝」と刻まれた石板が出土していたことの意味は大きい。この石板の存在を前提とするならば、この地域の伝説は房総・弘文天皇伝説の原型を形づくった歴史的現実を示しているとも考えられる。そのような観点にたつていえば、壬申の乱以後、弘文天皇にゆかりの人々は上総の地にいるオオ氏のもとへと移住を試み、その結果が俵田周辺の弘文天皇伝説に反

映し、さらに、そこから九十九里北部へと移って、「連金子英勝」にまつわる伝説を残した、とも考えることができるのである。

最後に、旭市に伝わる明内豊章所蔵図書にある「天慶3年9月」の意味について、若干触れておくことにしたい。そこには、どのような含みがあったのだろうか。一つ考えられることは、平将門の乱とのかかわりである。将門の乱は京都の朝廷に反旗を翻し、東国の独立を企図するものであった。だがその反乱は朝廷軍の討伐より早く、藤原秀郷によって鎮圧されてしまう。天慶3年2月のことである。「天慶3年9月」というのは将門の乱以後の時期に相当する。ここから考えられることは、敢えて弘文天皇に結びつくような伝説を明記することによって、古来からの東国と朝廷とのかかわりを示し、朝廷への帰属を明確にしようという意図があったのではないか、ということである。

第8節 結 語

房総・弘文天皇伝説は房総に数多く残されている伝説のなかでも、とりわけ傑出した伝説の一つである。地域的な広がりがあり、残された伝説は詳しすぎるからである。これは明治時代になってから、弘文天皇伝説が熱心に収集されたことの結果ともみなすことができるはずである。これによって、埋もれてしまう可能性のあった伝説が、きちんと紙に書かれた記録として残されることになったわけである。

地域的な広がりについていうと、これはもともとの伝承地を中心にして、徐々に周辺に広がっていった、ということだろう。その背景には、伝説を担っていた同族の拡大と信仰の広がりという二つの要因が考えられるはずである。

その信仰という点についていうと、ここでも熊野信仰が決定的に重要である。これは伝説の詳しさとも関連するのだが、熊野の宗教者たちは伝説の原型にさまざまな脚色をほどこして、信仰と伝説を広めていったのだろう。

だがそれは、単に「貴種流離譚」という枠のなかの伝説の一つとして取り扱って済むものではない。房総には、その貴人が弘文天皇（大友皇子）である必然性があった。それはもちろん、先住者としてのオオ氏の存在である。

ということで、房総・弘文天皇伝説は古代・オオ氏の時代に源を発し、古代末期から中世にかけての熊野信仰の枠組みのなかでさまざまな脚色を加えられていったのだろう。そして古代、中世にかけての伝説の背景にはいずれも鉄などの金属生産がからんでいる。少なくとも、江戸時代に創作された伝説というわけではないのではなかろうか。

文 献

- 旭市市民会館・図書館・文書館，1993，『弘文天皇妃伝説』。
- 旭市史編さん委員会，1980，『旭市史』第1巻，旭市役所。
- 藤澤衛彦編，1917，『日本傳説叢書 上総の巻』日本傳説叢書刊行會。
- 藤澤衛彦編，1919，『日本傳説叢書 安房の巻』日本傳説叢書刊行會。
- 平野 馨，1982，『伝承を考える—房総の民俗を起点として』大和美術印刷。
- 星野良作，1973，『研究史 壬申の乱』吉川弘文館。
- 細矢藤策，1989，『古代英雄文学と鍛冶族』桜楓社。
- 池田末則，1977，『日本地名伝承論』平凡社。
- 井上孝夫，1997，「下総地域における龍神信仰」『千葉大学教育学部研究紀要』45（Ⅱ）：17-26頁。
- 井上孝夫，2000，「畠山重忠と鉄の伝説」『千葉大学教育学部研究紀要』48（Ⅱ）：9-19頁。
- 井上孝夫，2003，「『逆川』伝説の研究」『千葉大学教育学部研究紀要』51：225-235頁。
- 毎日新聞千葉支局，1973，『九十九里』九十九里史料調査研究会。
- 真弓常忠，1985，『古代の鉄と神々』学生社。
- 村上恭通，1999，『倭人と鉄の考古学』青木書店。
- 丹羽基二，1992，『苗字の由来百科』河出文庫。
- 小櫃村誌編纂委員会，1978，『小櫃村誌』千葉県君津市。
- 奥平正子，1990，「君津の白山神社に伝わる大友皇子の落去伝説」荒川法勝編『千葉県史跡と伝説』暁印書館：17-19頁。
- 大和岩雄，1991，『人麻呂伝説』白水社。
- 柴田弘武，1980，『東国の古代—産鉄族オオ氏の軌跡』崙書房。
- 柴田弘武，1998，「常総の風土と古代製鉄」谷川健一編『金属と地名』三一書房：272-285頁。
- 清水 寿，1994，『鋳師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』。
- 高崎正秀，1971，『高崎正秀著作集5・物語文学序説』桜楓社。
- 高崎繁雄，1984，「白山神社—君津市俵田字天神台」谷川健一編『日本の神々 神社と聖地』11（関東），白水社：240-243頁。
- 谷 有二，2000，『「モリ」地名と金属伝承』未来社。
- 豊田有恒，1994，『大友の皇子東下り』講談社文庫。
- 土橋幸一，1996，『小櫃川流域のかたりべ』旧君津市上総農業協同組合。
- 吉田政芳，1978，「白山神社と大友皇子の伝説」ふじかおる編『上総の民話』土筆書房：202-207頁。
- 若尾五雄，1994，『黄金と百足—鉾山民俗学への道』人文書院。